

#### 4. 対外経済政策

##### § 1. 構造政策

- ・ 対外経済政策でもミクロ面の政策が存在する。貿易政策はその典型である。特定産業の保護育成や逆の自由化・関税引き下げなどがそれである。その特徴は、いずれも国民経済の構造変化を適切な方向に向かわせること、言い換えれば成長を導くことを目的としてなされる。無論、自由通商体制の確立や所有権保護であるとか、国際的基準の確立であるとか一般的なミクロ的経済政策とも重なる側面はあるが、構造政策である側面に比重が置かれる。これは、1国の富の増加をいかに不完全市場としての国際経済の中で達成するのかが課題となることに拠っている。
- ・ 戦後日本は、前にも述べたように産業育成政策を採用し、①生産性基準、②比較優位基準、③所得弾力性基準を置いて、生産性上昇率が高く、日本で産業競争力が確保でき、しかも内外の成長に伴って需要が拡大する産業を保護育成した。その成功例が電気・電子産業、機械産業であり、成功と必ずしも言えない成果に終わったのが化学産業である。原子力や航空・宇宙に関しては、国家プロジェクトは建てられたが、輸入に依存した。

##### § 2. マクロ対外均衡

- ・ 市場経済が国際的に外部に開放されるとき、マクロ経済均衡は対外的な側面を有する。最も直接的には、経常収支（対外経済余剰）が総需要を構成することから課題が生じる。また、貯蓄－投資の負の不均衡がある場合には、可能な成長を支えるための資本の獲得という問題も存在する。
- ・ こうしたマクロ経済均衡と関わって、固有に対外的に問題となる領域がある。「国際金融」と言われる領域がそれである。固定相場制度の場合には国際収支均衡が課題となり、変動相場制度の場合には適切な為替相場の安定的実現が課題となる。
- ・ さらに、現代ではマクロ経済均衡は各国の国際的な政策と経済関係の相互依存の中で実現されるところから、国際収支均衡や均衡為替相場といった対外均衡のみでなく適切な成長やインフレ率なども国際的条件を考慮しなければならない。このような問題については、クルグマン＝オブズフェルドの「国際経済Ⅱ」（新世社）が良い導きとなる。

<コーヒー・ブレイク 4. 国際収支>

- ・ 国際収支表とは、IMFのマニュアルにしたがって作成される。
- ・ 国際収支表は、外国から貨幣が流入する取引を貸し方（資産）、外国に貨幣が流出する取引を借り方（負債）に記入する。

勘定項目	備考（項目の説明）	収支対照	
		貸方(credit)	借方(debit)
1.経常収支 CA			
A.貿易収支	財（モノ）の移動に伴う貨幣移転	輸出	輸入
B.サービス収支	サービス（保険、運輸、情報、旅行など）の移動に伴う貨幣移転	輸出	輸入
C.所得収支		受け取り	支払い
1) 利子・配当	資本サービスの対価支払い		
2) 賃金送金	外国人労働への支払い賃金の内送金分		
D.経常移転収支	一方的な所得移転（贈与、国際機関への拠出金など）	受け取り	支払い
2.資本収支 KA			
A.投資収支		被投資（流入、資本輸入）	投資（流出、資本輸出）
1) 直接投資	経営権の移転を伴う投資		
2) 証券投資	証券などへの投資の内、経営権の移転を伴わない投資		
3) その他投資			
B.その他資本収支			
4) 資本移転	債務免除など	被移転（流入、資本輸入）	移転（流出、資本輸出）
5) その他資産	特許権など無形資産取引		
3.外貨準備増減 $\Delta R$	$CA+KA=\Delta R$ （外貨準備増加が複式簿記式の記入によって借り方に、減少は貸方に記載されることに注意）	外貨準備減少	外貨準備増加
4.誤差脱漏	記入されたフロー（1+2）と外貨準備増減（3）の差額	受け取り	支払い

- ・ 複式簿記式の記載がなされるので、最後は均衡（ $CA+KA+\Delta R=0$ ）となる。
- ・ CA と KA はフローであり、 $\Delta R$  はストックの増減である。注意がなのは、 $\Delta R$  は増加

した場合に借り方（ネットの収支を示すときはマイナスか $\Delta$ を付す）に記載され、減少した場合に貸し方に記載されることである。これは一般の貸借対照表の概念を想起するとわかり易い。

- 固定相場制では、瞬間的なフローの収支が相場を動かすときに相場変動を固定幅に押さえ込むために、フローが赤字のときは当局が外貨売りの介入（為替供給増加）をし、黒字のときは外貨買いの介入（為替需要増加）を実施する。外貨買いの場合には、それに伴い市中に貨幣が増発されるので、それを吸収するために売りオペレーションがなされるが、そういう政策を「不胎化」という。
- 変動相場制では、瞬間的なフローの収支不均衡でも介入はなされない。そこでその瞬間には $\Delta R$ は変化しない。ただし、フローの不均衡分はやがて $\Delta R$ に反映することが多い。それが生じないためには、 $CA+KA=0$ の取引が生じる必要がある。
- 誤差脱漏は、ストック増減とフローの収支が一致しないときの調整項目である。資本移動はよくフローの計上をのがれることがあり、また政策的にフローの計上が操作されることもあって、無視し得ない。
- $CA$ は、総需要を構成する「外需」であるが、これを構成する項目に「利子・配当収支」があることを看過してはならない。財とサービスの貿易収支に匹敵もしくはこれを上回る場合があることに注意する必要がある。